6

部落問題文芸・作品選集

部落問題文芸・作品選集

第6巻

古手川　忠助

水　平

世界文庫版

部落問題文芸作品選集　第六巻

昭和四十八年八月十六日発行　定価一、五〇〇円

発行者　松本富夫

発行所　株式会社世界文庫

東京都目黒区洗足二―一二―一五
電話（〇三）（七一六）六一五一（代表）
（七一三）九二四四（夜間）
振替　東京　七八四九八番　〒一五二

落丁、乱丁本はお取替えいたします。

小序

近時新思想の高潮に依つて、人間社會の階級的鬪爭は、次第に激烈の度を加へ!!果然!!水平運動の火蓋は切られました。然して、今や水平運動は唯單なる特殊部落のみの問題ではなく、人間生活上の重大問題として、社會全般の視聽を集注せしむるに到りました。此處に於てか私は、微力ながら愚作を公にして特殊部落の子と生れ、憐れ虐げられたる『弱者』の深酷なる『水平』への惱みを一般社會に訴へ、無理解横暴なる特權階級者の反省を促し、以つて社會改造の一助ともなさんと試たのであります。若し幸にして賢明なる讀者諸君に依つて、其意の幾分たりとも掬んで戴く事が出來ましたならば、私に取つて、此上もない幸であります。

尙此拙文をお讀み下さる諸君へ、深く感謝して序文筆を擱ます。

柏木にて　　古手川忠助

創作

水平

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

一

洋々として流れ行く、豐後水道の水を奥深く抱き込んだ港の後方に、三方山に圍まれた、一懐の窪地がある。

其海邊の方を中心として、瓦葺や藁葺の家々が入り雜つて、百戸足らずの一小村を成してゐる。村の中央を貫いて痩せ細つた様な小道が、美しい小川の流れと縺れ合ひながら、ひよろひよろとして山路の方に通つてゐる。

本村外れとも言ふ所からは、殊に家並みは疎になつて、さながら暗夜の星の様に、其處此處にぽつりぽつりと、不規則に散らばつてゐるばかりで、後は唯、田と、畑と、それに通ふ細い細い畦道のみ。

其村外れの處に、小川と道とに挾まれて、花崗石の玉垣を圍らした、古い氏神様の境内があつた。境内には松や檜や杉等の常磐木が、青々として生ひ茂り、其間を縫ふ様に、梅の古木がちらりぱらりと生え拔いてゐる。

それは此村住民全體の、尊崇信仰の的となつてゐる天神様の境内である。

社は古風な白木造りで奥殿と拜殿とが向ひ合つて建つてゐて、見るからに田舍びた建方ではあるけれど、それが爲に此順朴な村人の信仰の念を殺ぐ様な事は無く、却って或る種の神々しさを添へてゐた。

境内はかなり廣い空地を持つてゐる。

そして唯一年に二度ある大祭の外は堂守さへも居ない此氏神の境内は、昔々其昔此村始まつてより此方、常に歴代の餓鬼大將連の遊戯場となつてゐるのであつた。

群れ來て遊ぶ子供等は時代と共に變つても境内の様は更に變らない。唯、去年迄は青々として榮えてゐた松が枯れて切り倒されたり、村の誰彼の寄進した新しい銀杏の木が鳥居の横手に植ゑられたりしたばかりで、年と共に古り行く社の様も一向それとは目にも着かず、かくて年月は廻つて行く……

頃は春未だ早い二月の半、天神様の境内に咲く梅は今を盛りと馥郁たる香りは堂に滿ちて、鶯の鳴く音もいとど面白く、暖い南國の春風は枝から枝へ渡り歩く小鳥の胸毛をなでる様に吹いて行く、ぽかぽかとした午後の太陽は咲き誇る梅の間を縫つて、拜殿の中迄ゆつたりとした日足を投げ

てゐる。そして唯一心凝つた信神家の外は滅多に訪ふ人も無い御社は、いやが上にも靜まりかへつて、神前に遊ぶ子守達の聲のみが時折神々しい靜けさを破つて聞ゆるのみ。

宛ら名人謀の繪卷物にでもありさうな、神境、そのまゝであつた。

今しも學校の歸りと見えて、十一二を頭に腕白盛りの子供が十人餘り境内を目指して勢能く駈けつけて來た。

そして拜殿と奥殿の間の廣場迄來ると、中でも一番大將らしい子供が立ち停つて大聲に、

『おーい皆之から球投げだ』

と怒鳴れば、一同は手に又は肩にした學校の道具を、杉の根方にかなぐり捨てゝ、

『源ちやん僕も入れて』『源ちやん僕も』

『僕もな——』と、口々に唱へながら元氣らしく剽輕な媚びを見せつゝ大將の下に集つて行つた。

今迄靜かであつた神境も、此腕白な小供達の侵入に依つて、忽ち騷動しい現實の世界に引き戻されてしまつた。

暫くの間はがやがやと口喧しく饒舌り合ふ、子供らしい癇高い聲が、境内に響き渡つた。

が間も無く、今源ちやんと呼ばれた腕白大將は、得意氣に、そしていとも應揚な態度を持つて、

一同に許諾の點頭を與へてから、扨て益々大將然として、それぞれに位置の配置を命じた。

皆は命じられた位置に着いた。源一の手から白い護謨鞠が飛んだ。そして次から次へと、彼等の勳作は實に氣持ち能く、敏捷に運ばれて行つた。

そして此愉快な小競技は、刻一刻と白熱化して行く……。

此有樣を先刻から、さも面白さうにと言ふよりは、寧ろ恨めしさうに眺めつゝ片隅の方に立つてゐる、之もやつぱり十許りの男の子があつた。

と見ると、目鼻立ちは人並勝れて麗はしく、きつと締つた口元は、其悧潑な性質を示してゐる。けれども額と眉との間に、何處と無く暗い影の走つてゐるのは、如何に此子供が年にも似合はぬ苦勞性であるかを物語つてゐた。

暫しが間彼は、球を受取つて投げる得意氣な子供達の樣や、一人の手から一人の手へ移つて行く素早い球の行方を物惱まし氣に眺めてゐた。

がかうして競技が次第に熱して行き、それにつれて子供達の活氣着いて行く樣を見てゐると、彼自身も段々其仲間に、引き入れられる樣な氣になつて、最早其處にぢつとしては居られ無くなつてしまつた。

何時しか彼は身の不幸な境遇も打ち忘れて、活々として小走りに、彼の餓鬼大將の前に進み出で勢能く頭を下げて、

『若旦那私も入れてお呉れ』

と言ひながら、媚びる樣な目を持つて相手の顏色を覗つたが、其時彼の姿勢は、最早大將の命令に依つて取るべき、次の行動に移りかけてゐた。

源一は今投げかけてゐた手を止めて、此侵入者の顏を見た。がそれが與作であるのを知ると、馬鹿馬鹿しさうに、相手の方には目もくれずに、

『お前なんぞ入れるもんか』

と云ひ放つて、再び球を振り上ぐれば、與作は頻る意氣込みを拔かれた樣に悄れ返つたが、それでも又源一の前に廻はつて、

『若旦那さう言はずに私も入れて、なー若旦那』

とばかり專らに頼み入る。

源一は今最も得意とする動作を着けてゐる矢先であつた。球は輕快に大速度を以つて飛ばんとする一殺那、再び與作の爲に妨げられてしまつたので、彼は腹立しさの餘り、怒の目を持つて鋭く相

手の顏を見据ゑた。

『馬鹿ッ、邪魔をすると、打擲りつけるぞ！』

と遂に生來の癇癪玉を破裂さして、聲荒らげて怒鳴りつけた。

其容易ならぬ權幕に、與作は何か知ら呟きながら、頭を抱へて身を引いた樣は、恰も飼主に叱られた時の、小犬の樣に憐なものであつた。

けれども慘酷にも源一は、さながら飼主としての權威をでも傷けられたかの如く、威丈高になつて、

『こら與作、早く其處を退かんか、こら』

と情も無く怒鳴りつける。今にも鐵拳は下りさうな勢であつた。

と今迄各自の任地にあつて、忠實に働いて居た仲間の者は、素破こそとばかり其場を指して駈け出して、

『源ちやん、どうした』、『どうした、源ちやん』

と口々に好意と、媚びとを見せて呼びながら、二人の邊りを取り卷いた。

源一は好意ある一同の應援に一層力を得て、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

『此奴がの……玉投げに入れて呉れと言ふんだ』

と言つて、今度は與作の方を見下して、

『こら、早く其處を退かんと球が衝當るぞ、馬鹿』

と極め付ける。其態度には故意とらしい落ち着きを見せてゐた。

一同は言ひ合はした樣に、蔑む樣な目を向けて、相手の子供を見た。

『こら與作、お前は俺達の遊びの邪魔をすると酷い目に合ふぞ、馬鹿、お前と一緒に遊ぶ奴があるもんか、穢多、穢多、穢多の子』

と口々に罵るのであつた。

其憎々しい罵詈雜言を聞いた時、與作は子供心の一條に、むらむらと込み上げて來る口惜しさと、怒りとに、思はず小さな兩手を握り締めて、ぐつと相手の子供達を睨みつけた。

然し彼は怜悧である。年にも似合はぬ苦勞性であつた。彼はかうした怒の瞬間にさへ、尙考慮の豫猶を持つてゐた。それが憐むべき彼の境遇なのだ。

此時彼の頭の中には、懷しい兩親の顏が微に浮び上つた。渦卷き返る怒りの中に——。與作ははつと其顏を見詰めた。

が次の瞬間には、最早兩親の顏は何處にも無く、何時しか彼の目の中には、熱い涙が浮び上つて居た。

それと同時に與作は、日頃から口癖の樣に言ひ聞かされてゐる、兩親の言葉を思ひ起した。

『與作、お前は眞實に不幸な者ぢや、他家の坊ちやん方の樣に、立派な家に生れたなら、何の苦勞も無いのぢやけれど、お前の家は祖父樣の代に、賤しい稼業をしてゐた爲、他人からは穢多、穢多と蔑まれ、何にも知らんお前迄が、こんな苦勞をせにやならん、けれどのう與作、それも之も皆前世からの約束事、神樣の仰せぢやから、決して他人を恨んぢやならんぞ、若しお前が村の坊ちやん方と喧嘩でもしたら、私達親子は最早此村には居る事が出來んのぢやぞ、のう與作、假令人からどんな酷い目に合はされても、必ず我慢せにやならんぞ』

と兩親は何時も何時も、涙ながらに言ひ聞かせるのであつた。

自分達親子は此村に居られなくなる！

未だ十許りの頑是無い與作には、其難しい埋屈は解ら無かつたけれど、此一言丈はどう言ふ譯か兩親に言ひ聞かされる度毎に、深く彼の幼い腦裡に滲み込んで行つた。

で彼は之迄にも、隨分出來兼ぬる程の我慢もし通して來たのである。

其弱味に附け込んで、益々募つて來る子供仲間の我儘な迫害に、與作は遊び盛りの樂しかるべき時代をも、一人淋しく、悲しい月日を過して行かなければならないのであつた。

勿論それは極めて斷片的に、然も一瞬の間に亂れ勝ちの腦裡を掠めて通つた閃影に過ぎなかつたけれど、彼は之迄に數多く斯うした悲しい經驗を持つてゐる丈に、非常に大きな感激を、怒り立つ小さな心に受けたのである。

で次の瞬間には、張り詰めてゐた氣合が一時に全然り拔けて、彼はだらりと首垂れてしまつた。勝ち氣に乘つた相手は更に詰め寄つて來る。與作はぢりぢりと身を引かなければならなかつた。主人に叱られた小犬の樣に悄々と後しだりに……。

然も彼の怒は未だ解けてしまつたのでは無い、兎もすると發作的に、相手の子供等の中に飛び込んで、當るに任せて力一杯打擲りつけてやり度い樣な怒氣が、渦卷いて震ひ起るのであつた。けれども彼は一所懸命にこれを靜めた。

與作の意氣地無い樣を見極めると、相手の子供等は、張り合ひ拔けでもした樣に、最早それ以上に追はなくなつた。

與作はぢりぢりと後退つて、自分と相手との距離が大分離れて來た時に、油斷を見すまして踵を

返へすと、行手も見ずに駈け出して行つた。暫しが間子供等は氣持ち好ささうに慘めな與作の後姿を眺めてゐた。そして中には尙其後を追ひ駈け樣とする者もあつたが、源一は寧ろ馬鹿馬鹿しさうにそれを制した。

聽て勝ち誇つた子供等は、再び面白さうに球投げを始めた。

與作は無我夢中で奥殿の裏迄駈けて來た、此處迄來るとやつと安心した樣に、少し足を休めてそつと後を振り返つた。

幸ひ誰も追ひ駈けて來る者も無かつたので、彼は俄に心の緊張を失つて、蹌踉く樣に奥殿の裏塀に近寄ると、ぐつたりとそれに身を投げてしまつた。

と今迄堪へに堪へてゐた怒りと悲しさとが、一時にぐつと込み上げて來て、熱い涙が後から後からと止め度も無く湧いて出るのであつた。

そしてともすると、吃逆(しゃく)り上げさうになる口元をしつかりと食ひ締めながら、彼は激しい煩悶に沈んだ。

『噫々、何故俺ばかりはこんなに仲間外れにはされるのだらう、皆、あんなに面白さうに仲好く遊んでゐるのに……』

と思ふと子供心にも、何か知ら我れと我身を呪ひ、人を呪ふ樣な氣持ちにさへなるのであつた。それにつけても、今あゝした堪へ難い侮辱を受けた事の口惜しさが、一層大きな渦となつて、無闇と頭を搔き亂すのである。

何と言ふ悲慘な幼兒の境遇であらう！

憐れにも與作は、物心附くと間も無く、身の不幸な境遇を知らなければならなかつた。

我儘な子供仲間の迫虐は、既に此時から始つたのであつた。

で彼は何時でも村の遊び仲間と、對等であり度い等とは決して思はなかつた。

若し仲間にさへ入れて呉れるなら、假令球投げの時の球拾ひにでも、兵隊ごつこの雜兵にでも、馬にでも、兎に角仲間さへ入れて貰へば、それで滿足するのであつた。否、それに依つて彼は虐げられた憐れな心を、慰めて行く事も出來るのである。

けれどもどうした譯か、子供等はそれをさへ彼に許さうとはし無いのみか、兎もすると寄つて集つて、彼一人を虐めて虐めて虐め拔くのであつた。

與作は唯、それが悲しくてならなかつた。

未だ頭の幼稚な彼は、父母の言葉は疑ふべからざる事實である、と堅く信じては居たけれど、斯

うした悲しい場合に遭遇する度毎に、幼いながらも色々考へて見ても、

何故彼ばかりが之程迄に、他人に虐げられなければならないか、何故又神様は、斯程迄に彼を憎まなければならないか

と言ふ事はどうしても解らなかつた。

『神様は何事も御存じで居らつしやる、間違つた事をさへしなければ、神様は屹度お恵み下さるよ、與作信神を忘れるな』

と兩親は常に彼に言ひ聞かせた。

で彼は今日が日迄、間違つた行ひは愚か、さうした考をさへ持つた事は少しもなかつた。

そして毎朝毎晩、兩親と共に神前に額いて、小さな手を合せて、一所懸命神の加護を願ひ、身の幸福を祈る事を忘れないのであつた。

天神様の前を通る時にでも、彼は心からの禮拜を忘れた事は一度も無かつた。

それは實際眞劍であつた。

けれども憐れにも彼は、之迄に唯の一度でも、血肉を分けた兩親の外は、世間の誰からも、愛を持つて接しられた事はないのみか神の恵みさへも受けた事は一度だつて無いのであつた。斯うして

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.